

日独バイリンガルのナラティブ構造について
 -日本語ナラティブとドイツ語ナラティブの比較-
The Narrative Structure of Japanese-German bilingual students
- Comparison of the Japanese and the German narratives -

赤木美香[†]
 MIKA AKAGI

[†]お茶の水女子大学,
 Ochanomizu University
 mika@akagi.de

Abstract

This research aims to explore the language use of Japanese-German bilinguals. Minami (2010, 2011) researched the narrative structures of 40 Japanese-English bilingual children, aged 6 to 12, and observed strong elements of temporality. Elements of causality were also present. This study compared the Japanese narratives and German narratives of 20 Japanese-German bilinguals by focusing on the quantities of action phrases and quantities of conjunctions related to causality.

Keywords — narrative , bilingual , temporality, causality, frog-story

1. はじめに

De Houwer (2009), 田浦(2014)は, 公教育で教育媒体言語がバイリンガルの優勢言語となり家庭内言語が非優勢言語となることに言及し, この年齢以降の非優勢言語の発達研究の必要性を喚起している. ドイツ語公教育で扱われるドイツ語はモノリンガルのように身につくのだろうか, そして非優先言語の日本語はどのようにして身につくのだろうか. これまで日英バイリンガルのナラティブは多く研究されてきたが (南 2007, 2010, Minami 2005, 2011), 日独バイリンガルのナラティブは管見の限り見当たらない.

本研究では, 日独バイリンガルの両言語のナラティブ構造について, 言語形成期後半(10-15歳)の生徒 20人のナラティブデータを収集し分析を試みる. 南(2007, 2010), Minami(2005, 2011)は, 日英バイリンガル児童のナラティブを分析し, 時系列

型要素が主に現れるが因果律型要素も見られると指摘した.

そこで本研究は日独バイリンガルのナラティブにおいて, 時系列型構成要素として展開部の出現率を, 因果律型構成要素として接続表現の出現率を調査し, 先行研究との比較を行う.

2. 先行研究

Labov(1972)は, ナラティブの4つの構成要素, (1)発端部(2)展開部(3)解決部(4)終結部を提案している. 南(2010)は, 4つの構成要素を frog-story (Mayer, 1969)に適用し, 日英バイリンガル児童 40人(6-12歳)のナラティブデータを収集し分析している. 展開部において時系列の前景描写がなされるため(南 2007:198), 展開部の平均発話率が時系列型構成要素の指標になると考えられるが, 南(2010)によると展開部の平均出現率は47.93%であった(p.77).

渡辺 (2004)は, 「アメリカでは, 教師も子どもも因果律の表現を多く使い, 論拠をあげて説明や説得をする」と述べている. 教室ディスコースの違いに注目し, アメリカの児童と日本の児童(5・6年生, 11歳)に同じ4コマまんがを見せて語らせた結果, 日本の児童の93%が時系列表現, アメリカの児童の65%が因果律表現を使用していたことが報告されている(p.44). 内田(1999)においても, アメリカに移住した日本人児童と現地の英語母語話者児童を対象にし, 文字のない絵本の挿絵に沿って物語を創作させている. その結果, 日本人児童は, 物語の起こった時間順

序に沿って時系列に説明した。これに対して、英語母語話者は最初に物語を統括し、結末を先に述べるなど、原因に遡って説明する因果律で説明したと述べている。南(2005)では、バイリンガルの各言語のナラティブはそれぞれの文化の影響を受けることが示唆されている。そこで、本研究では、日独バイリンガルのナラティブデータを用いて、ナラティブ構造に関する考察を行う。

3. 研究課題

日独バイリンガルのナラティブ構造について、言語形成期後半(10-15歳)の生徒20人のナラティブデータを分析し、日独バイリンガル生徒の言語使用の様相を明らかにすることを目的とするため下記の研究課題を挙げる。

RQ1:

日独バイリンガルの日本語・ドイツ語ナラティブの時系列型・因果率型構成要素の特徴はどのようなものか。

RQ2:

日独バイリンガルの日本語・ドイツ語バイリンガルナラティブの時系列型・因果率型構成要素は、日本語・ドイツ語母語話者のそれぞれのナラティブ構造と異なるかについて、

2-1 日独バイリンガルの日本語ナラティブと日本語母語話者のナラティブは異なるか。

2-2 日独バイリンガルのドイツ語ナラティブとドイツ語母語話者のナラティブは異なるか。
(発表で明らかにしたい。)

4. 実験方法

本調査では、南(2007, 2010)と同様に frog-story を使用し、対象者にまず絵本を見せて、口頭で物語を日本語・ドイツ語の両言語で話してもらい、ナラティブを録画し、それを文字起こししたものをナラティブデータとして使用した。対象者は日独バイリンガルの20人(10-15歳)である(10-12歳:8人、13-15歳:12人)。そのナラティブデータ内の時系列型構成要素を調査するため、それぞれの展開部における発話率を算出した。さらに因果律型構成

要素を調査するため、frog-story 全体に現れた接続表現(～ので、～から、～すると) (南 2010: 79)の出現率(因果関係を表す接続表現数/発話数)を算出し、比較分析を行った。

5. 調査結果

RQ1の日独バイリンガルの日本語・ドイツ語ナラティブの時系列型・因果率型構成要素の特徴はどのようなものかについて、日独バイリンガルと日本語母語話者の日本語ナラティブについて展開部に注目し比較してみる。まず、それぞれの展開部の例を見る。

日独バイリンガル児童7歳	
展開部	1)で、そのあとは森ん中を探してて、 2)で、「カエルさんどこだ」って行って、 3)で、その時には、土に穴があって、そのところに、4)そしたら、マウル?なんだっけ・・・モグラがでてきて男の子は「くさいっ」って言って、 5)そしたら、木の穴をみて、かえるどこだあとと思って、 6)そしたら、フクロウがでてきて、すごく驚いて落ちちゃったの。 7)で、そしたら、そしたら、えっと、あの一ふくろうは飛んでって、8)で、男の子は怖くて、 9)で、そのあと男の子は、石の前をみていて、 10)で、そのあと石の後ろをみたら、その鹿がいて、 11)で、鹿の頭におとこの子がぼっついて、 12)そのあと水に落ちちゃって、

母語話者児童7歳	
展開部	1)で、探しにいきました。「かえるさん、かえるさん」とよんでもカエルはいません。 2)しばらくいってみると、んー穴がありました 3)その中から、リスさんが出てきました。 4)で、わんちゃんは、蜂の巣を見て揺らしてみました。 5)すると、蜂がブーンと出てきて、ブーンと出てきて、驚きました。 6)で、わんちゃんは、木を揺らして蜂の巣を落としてしまいました。 7)すると、蜂は怒って、まてまてっと追いかけて、で、まてまてっとおいかけて 8)わんちゃんは逃げだしました。9)その様子をリスさんは見っていました。10)ぼうやもみていました。 11)ぼうやも、わんちゃんが心配な <u>ので</u> 、走ってわんちゃんを取りにいきました。 12)そして、 <u>すると</u> 、木のところにふくろうがいました。

日独バイリンガルと日本語母語話者の日本語ナラティブに見られる特徴としては、場面展開にお

いて「そしたら：共存する2つの事態や継起する2つの行為や作用を表すとされる(李慧, 2013)」の1種類だけのつなぎ言葉を頻繁に使用している。また、日独バイリンガルは、結束性のバリエーションが乏しいと言える。

一方、日本語母語話者は、主人公や登場人物の行動に理由づけをしながら文脈を構築していることが分かる。また、接続表現も「すると」や「ので」を使用し、聞き手に次に何が起こるのか推測させるストラテジーを使用していると言える。

次にRQ2の日独バイリンガルの日本語・ドイツ語ナラティブの時系列型・因果率型構成要素は日本語・ドイツ語母語話者のそれぞれのナラティブ構造と異なるかについて、時系列型、因果律型構成要素に関して比較を行った。

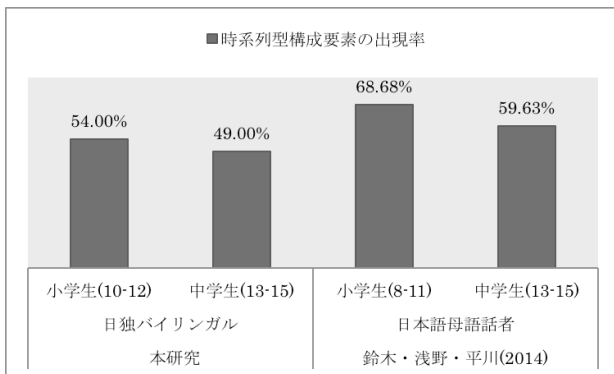


図1 時系列型構成要素の比較

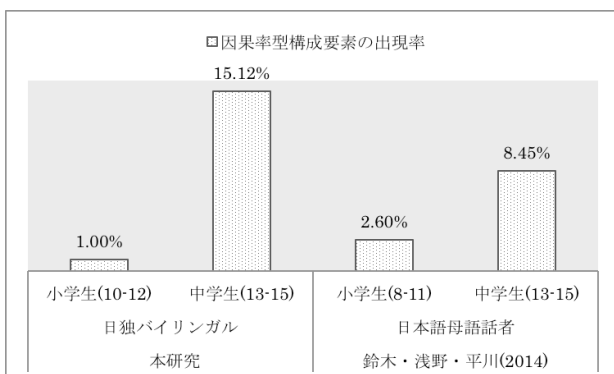


図2 因果律型構成要素の比較

まず、時系列型構成要素の指標となる展開部における平均出現率については、10-12歳では54.0%、13-15歳では49.0%で、日独バイリンガルのナラティブデータにおいて年齢が上がるにつれて、減少傾向を示している。鈴木・浅野・平川(2014)の、小・中学生の日本語母語話者10人のナラティブデータにお

いても展開部における平均出現率は、小学生が68.68%、中学生が59.63%と減少傾向にあるが(p.106)、日本語母語話者と日独バイリンガルを比較すると、小学生・中学生グループ両方において日独バイリンガルの方が時系列型構成要素の割合が少ないことが示唆される。(2つの研究の比較については、図3を参照)

因果律型構成要素を表す接続表現に関しては、今回の調査の10-12歳では1.00%、13-15歳は15.12%であった。鈴木・浅野・平川(2014)の小・中学生の日本語母語話者の調査で、因果律型構成要素が多く含まれると考えられる「評価」に当たる部分の平均出現率は、小学生が2.60%、中学生が8.45%と増加傾向にあった(p.109)。今回の調査の日独バイリンガルの接続表現と、鈴木・浅野・平川(2014)の日本語母語話者の評価の平均出現率は、完全には比較できないが、両者において、年齢が上がるにつれて因果律型構成要素が増加する傾向があり、しかも日独バイリンガルは、日本語母語話者よりも増加の割合が高いように思われる。(1.00%→15.12%)

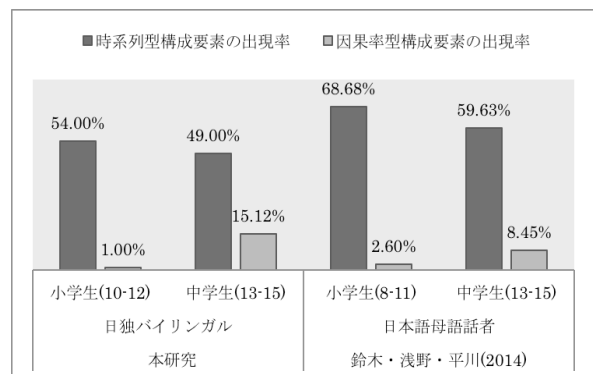


図3 ナラティブ構造の比較

6. 考察

日独バイリンガルのナラティブに関する今回の調査から以下のことが明らかになった。まず第1に、日本語母語話者と同様に、時系列型構成要素を表す指標となる展開部の出現率は年齢が上がるにつれて減少する傾向が見られた。ただし、日独バイリンガルのナラティブの方が、鈴木・浅野・平川(2014)の調査における日本語母語話者よりも、時系列型構成要素に当たる展開部の出現率は低いという結果が見

られた。日独バイリンガルの時系列要素の出現率が母語話者より低いのは、ドイツ語の言語的・文化的影響があるのかもしれない。第2に、因果律型構成要素の接続表現については、日本語母語話者と同様に、年齢が上がるにつれて増加する傾向が見られ、日独バイリンガルの増加の割合が高いと考えられることが明らかになった。これは、学習言語という意味での「母語文法の干渉」(内田,1999)によるものなのかもしれない。ドイツ公教育においては教育媒介言語がドイツ語であるために、丁度小学生から中学生への移行期(10-12歳)に学校で詳しく接続表現や文体の練習を行う。そのため非優勢言語となった日本語に対してドイツ語の転移の可能性が考えられる。

7. 今後の課題

日独バイリンガルのナラティブにドイツ語がどのように影響しているのかに関しては、今後ドイツ語母語話者の frog-story のナラティブに関する詳細な調査を行い、日本語母語話者とドイツ語母語話者、日独バイリンガルのナラティブ構造の比較をすることが必要だと考えられる。

参考文献

- [1]石黒 圭, (2008) ”論理の接続詞”, 文章は接続詞で決まる, 東京:光文社新書, pp.55-85
- [2]内田伸子, (1999) ”第2言語学習における成熟的制約”, 桐谷 滋(編), ことばの獲得, 東京:ミネルヴァ書房, pp.195-228
- [3]鈴木一徳・浅野明代・平川眞規子, (2014) ”日本語母語話者のナラティブ構造に関する一考察”, 言語と文化(26). 文教大学.
- [4]南 雅彦, (2007) ”物語技法の発達 -日英バイリンガル児童の作話をどのように評定するか-“, 言語学と日本語教育V, くろしお出版, pp.193-212.
- [5]南 雅彦, (2010) ”接続表現-語りの談話標識として”, 言語学と日本語教育VI, 東京:くろしお出版, pp.65-85.
- [6]李慧, (2013) ”条件接続助詞と指示詞の文法化プロセス -「たら」「なら」を例として-“,

- 比較社会化研究, 第33号, pp.105-116 Social and Cultural Studies No.33(2013) pp.105-116.
- [7]渡辺雅子, (2004) 納得の構造, 東京:東洋館出版社.
- [8] De Houwer, A. (2009) ”Bilingual first language acquisition.” Bristol: Multilingual Matters.
- [9] Labov, W. (1972) Language in the inner city. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- [10] Mayer, M. (1969) Frog, where are you? New York, NY: Dial Press.
- [11] Minami, M. (2005) ”Keeping Japanese alive Narrative discourse skills in English- Japanese bilingual children”, Studies in Language Science.4, pp.149-164.
- [12] Minami, M. (2011) Telling stories in two languages: Multiple approaches to languages understanding English-Japanese bilingual children’s narratives. Charlotte: NC: IAP-Information Age Publishing.